
プロジェクト報告

YA'AT'EEH! An Intensive Workshop on Navajo (Diné) Culture & Communication に参加して

末 田 清 子 ・ 勝 又 恵 理 子

1. はじめに

末田清子および勝又恵理子は2018年3月8日から11日に開催された米国ニューメキシコ州, アリゾナ州, ユタ州付近に住むアメリカ先住民, ナバホ族 (Diné)¹⁾のコミュニケーション・スタイルに関して学ぶワークショップに参加した。このワークショップではニューメキシコ大学名誉教授 John Condon 氏と, 同大学で異文化コミュニケーションを教授する Chenoa Bah Jensen 氏 および Lorenzo Stillwell 氏が講師を務めた。最初はそのワークショップの概要を示し, 彼らの価値観や世界観の中核をなす包括的な (holistic) 考え方がどのように教育現場でコンフリクト解決法に反映されているかについて提示し, プロジェクトの報告としたい。

2. ワークショップ概要

Fig.1がワークショップの概要²⁾である。

March 8 (Thursday.) Albuquerque, New Mexico

Sleep Inn (Airport) Motel Conference Room: Introductions, overview and orientation.

1) Diné の人々は一般的にナバホ族という名で通っているが, 自分たちを指すときに Diné というので, ここでは「ナバホ族 (Diné)」と記す。

2) Chenoa Bah Jensen 氏の2017年11月10日付のワークショップ案内(電子メール添付資料)を参照。

March 9 (Friday) Visits to NACA (Native American Community Academy)³⁾

Indigenous sites (Fig. 2), lunch at Indian Pueblo Cultural Center;
travel through Pueblo and Diné lands; visit Window Rock, Arizona, capital
of the Navajo Nation (Fig. 3); personal tour of Navajo Nation Museum.
Overnight at The Navajo Nation Inn (in Window Rock)

March 10 (Saturday) Visit to a Diné home, discussing Diné/Navajo cultural and
intercultural communication; travel to Diné College in Tsaile, AZ;
presentations by scholars and students; cultural teachings, overnight
lodging at Diné College.

March 11 (Sunday) Return to Albuquerque; Reflections and conclusion

Fig. 1 : ワークショップ概要

本ワークショップが行われたのは2018年3月で、それは参加者の都合によるところがあるが、ナバホ族 (Diné) の世界観に深く関わっている。3月は動物たちが冬眠から目覚める頃であり、自分たちの文化や世界観を語るには望ましい時期であった。換言すれば、自分たちの生活の重要な部分である動物が冬眠している間は、ナバホ族 (Diné) について語ることを控えたいという主催者の意向があった。

ワークショップには、座学の他にニューメキシコ州内の教育機関 (NACA : Native American Community Academy) やナバホ族 (Diné) の学生のための大学である Diné College を訪ね、Navajo Nation 博物館のツアーに参加し (Fig.4)、ナバホ族 (Diné) の居住地や家庭を訪問し、伝統的な儀式に参加するなどのフィールド・トリップが含まれている。

英語を母語とする若者と、保留地で過ごす高齢者とはコミュニケーション・スタイルが異なり、その違いが伝統文化の継承 (Fig. 5 & 6) の支障にもなっている。実際、私たちはナバホ族 (Diné) の家庭で歓迎の儀式に参加する幸運に恵まれたが、そういった儀式を司ることができる部族のメンバーの数も現在では限られているようだ。教育現場で、独自の文化、ことば、歌を思い出して次世代に伝承していこうという動きがあり、カリキュラムのなかにもナバホ族 (Diné) のことばの習得だけでなく、ナバホ族 (Diné) の作家による文学作品を取り扱うなどの試みを垣間見ることができた (Fig. 7)。アメリ

3) NACA については < <http://nacaschool.org/> > を参照。

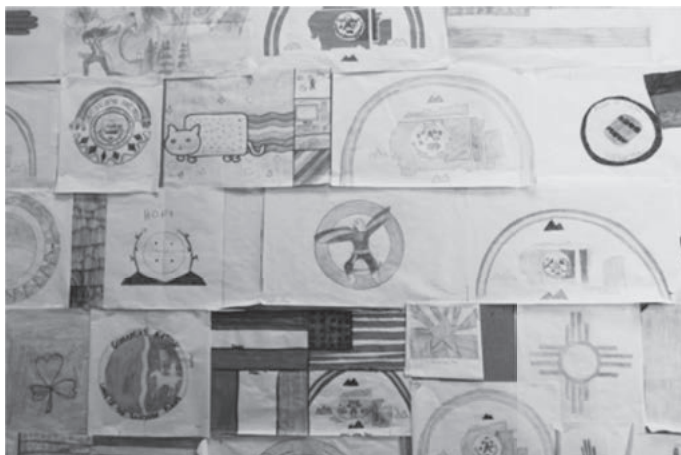


Fig. 2 : ニューメキシコ州内の教育機関
(NACA : Native American Community Academy) の
生徒達が属している部族のシンボル



Fig. 3 : Window Rock, Arizona, Capital of the Navajo Nation
第二次世界大戦中に部族のことばに基づく暗号を用いた
ナバホ族のコード・トーカーの像

カ先住民には南北戦争直後から部族のことばの使用を禁止され、寮生活を強いられ、英語のみで教育を受けた辛い過去がある（Reyhner, 1993）が、今回訪問した教育現場にはそれとは程遠い光景があった⁴⁾。

4) 勝又のかつての同級生も、幼いときにコミュニティの同年代の子どもたちと一緒に強制的に寮に入れられた経験をもつ。未だに” boarding school ” 時代の色濃い影はナバホ族（Diné）にも及んでいると考えられる。



Fig. 4 : Navajo Nation 博物館に展示された写真 :
ナバホ族(Diné)の伝統文化と苦難の歴史



Fig. 5 : ナバホ族(Diné)の織手



Fig.6 : ナバホ族(Diné)の織物

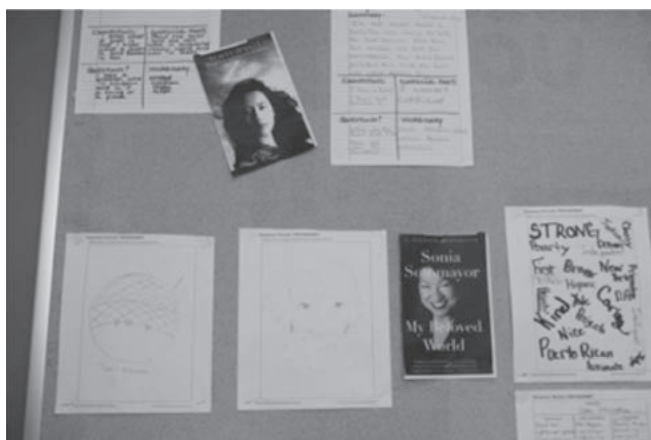


Fig. 7 : ナバホ族(Diné)の作家による文学作品を読む国語の授業

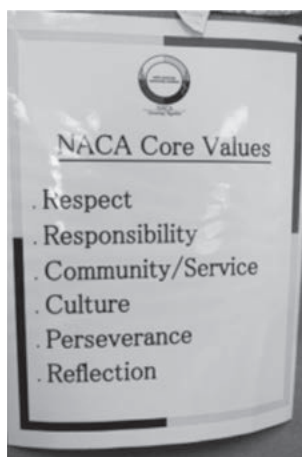


Fig. 8 : Native American Community Academy (NACA) の基本的価値観

3. 教育現場における包括的アプローチ

3.1. Wellness Wheel

NACA では先住民の知恵に対する尊敬・尊重の念を核として包括的なアプローチによって教育が実践されている (Fig. 8)。とくに心身ともに健康であるかを学期末ごとに児童や生徒との面談で確認していくウェルネス (wellness) 教育に力を注いでいる。付録1の Wellness Wheel が示しているように知的能力 (intellectual), 身体能力 (physical), 人間関係 (community) そして社会的・情緒的健康 (social/emotional health) の4輪から成立している。児童や生徒は、その4つの要素のなかでどこが満たされているか、またどこが満たされていないかを色分けするなどして示すことによって自己評価し、それを教員が確認し、なにか問題がないかどうかを確認していく。たとえば、知的能力の部分で欠落している児童に対しては、その児童が置かれている家庭環境や人間関係における問題などに注目する。

3.2. Eagle Room⁵⁾

Eagle Room は NACA の児童・生徒のみならずスタッフ、教員、家族などにも開かれたものである。過度のストレスや精神的苦痛を伴う事態に直面したときや、トラウマや心配事を抱えている人が自己を内省し、メディテーションをしたりすることによって

5) 詳細は <http://nacaschool.org/what-we-teach/wellness-and-support-services/> を参照のこと。

先住民族としての誇りを取り戻し精神的安定をはかるという趣旨の下、開設された部屋である。先住民族では知恵の象徴である鷺が当該部屋の呼称となっている。

ワークショップ講師によれば、児童・生徒同士で争いやコンフリクトが発生したとき、すぐに両者を向き合わせようとせず、この部屋を利用させ自己内省させる。また、当事者が置かれている状況を包括的に理解し、コンフリクトを単に両者の衝突と捉えるのではなく、本人たちが抱えている問題の顕在化としてとらえる。さらに、急に謝らせようとしたり、無理に両者を向き合わせたりするのではなく、時間をかけて、別の空間で活動させるなかでコンフリクトの素に両者が向き合うことでコンフリクトを解消させようとしているようだ。

Cupach, Canary and Spitzberg (2010) によると、コンフリクトが起こると、その素となる道具的目的 (instrumental goals) のみならずコンフリクトの当事者同士の関係性目的 (relational goals) や、自己呈示目的 (self-presentation goals) の達成が重要となる。そればかりか、当初の道具的目的達成の意思は、関係性目的や自己呈示目的の達成の意思にすり替わってしまうことも少なくない。Scheff (1997) は、コンフリクト後のシェイム (shame)⁶⁾の感情が払拭されずに二次的なコンフリクトに至るプロセスを詳述している。

また、シェイム (shame) を心理的健康資源として捉えるアプローチを活かし (Vanderheiden & Mayer, 2017)、末田 (Sueda in press) は帰国子女に対するリエントリー・トレーニングを提案している。しかし、そのなかには時間や空間という視点は焦点化されていない。今後、教育現場に係る異文化トレーニングのなかで、時間や空間という要素を採り入れたい。そして、NACA でのこの実践は、今後の研究素材として温めて行きたい。

4. まとめ

今回、通常は立ち入ることができない保留地などに入り、先住民族の家庭を訪問し儀式に参加するなどの貴重な機会を得た。西欧の医療と先住民族の知恵のバランスをとって治療する医療機関が米国には少なくないようだ (Joe, Young, Moses, Knoki-Wilson, & Dennison, 2016)。医療機関は諸事情により行くことが叶わなかったが、また次回の課題としたい。異文化コミュニケーションの祖として広く知られる Hall (1976) が先住

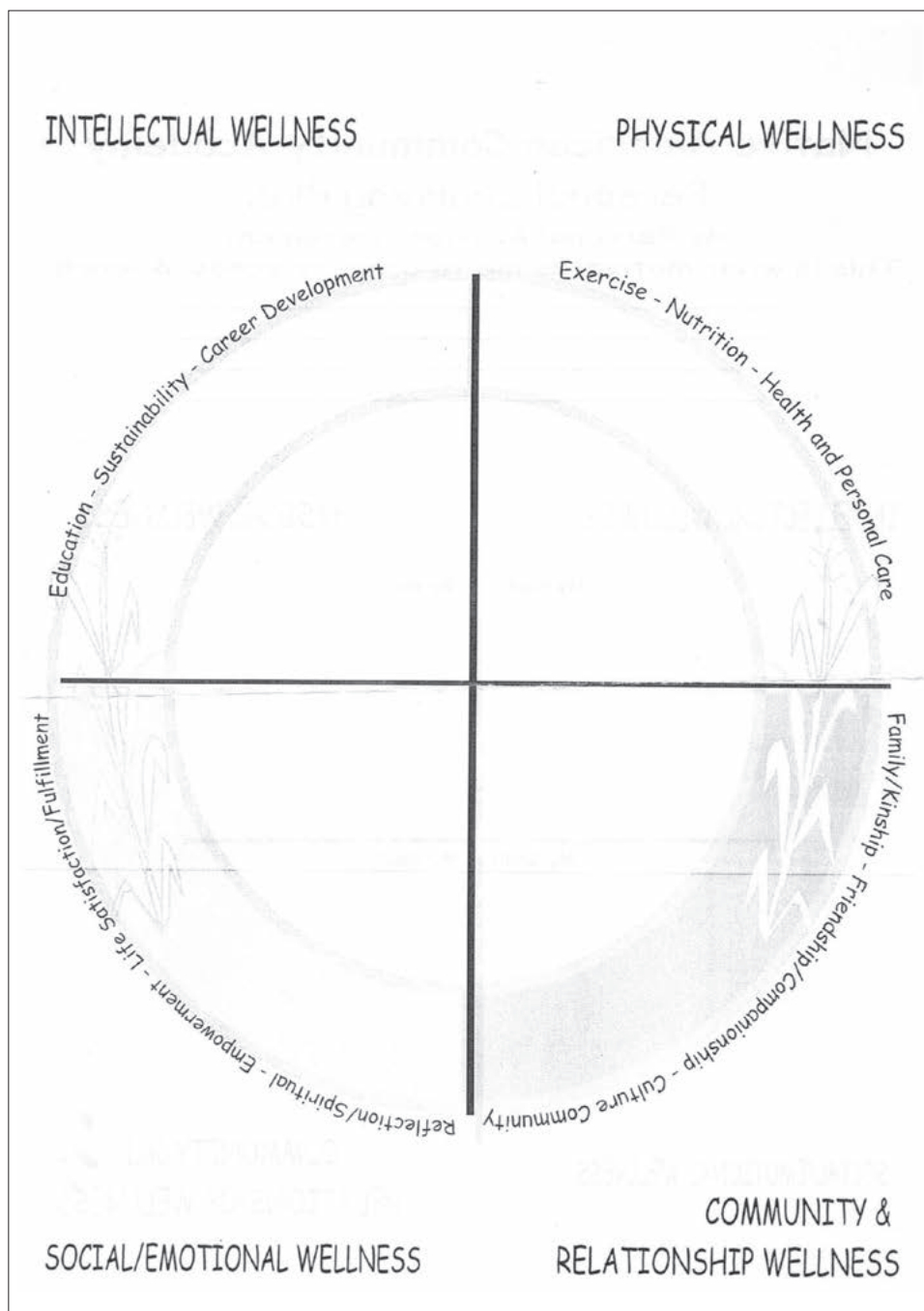
6) 日本語の恥という概念よりも広義の意味で捉えられる感情 (悔しい, 惜しい, 残念などを含む) である。

YA' AT' EEH! An Intensive Workshop on Navajo (Diné) Culture & Communication に参加して

民族から多くの知見を得たことは知ってはいたが、今回のワークショップは原点に立ち戻らせてくれた。

References

- Cupach, W. R., Canary, D. J., & Spitzberg, B. H. (2010). *Competence in interpersonal conflict*. Long Grove, IL: Waveland.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. New York, NY: Doubleday.
- Joe, J. R., Young, R. S., Moses, J., Knoki-Wilson, & Dennison, J. (2016). At the bedside: Traditional Navaho practitioners in a patient-centered health care model. American Indian and Alaska Native Mental Health Research (Online): *Aurora*, 23, (2), 28-49.
- Native American Community Academy (2016). Retrieved from <http://nacaschool.org/>
- Reyhner, J. (1993). American Indian language policy and school success. *The Journal of Educational Issues of Language Minority Students*, 12, 35-59.
- Scheff, T. J. (1997). *Emotions, the social bond, and human reality: Part/whole analysis*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Sueda, K. (in press). Shame as a health resource for the repatriation training of Japanese returnees (*kikokushijo*). In E. Vanderheiden, & C. Mayer (Eds.), *Transforming shame into context*.
- Vanderheiden, E., & Mayer, C. (2017). *The value of shame: Exploring a health resource in cultural contexts*. Cham: Springer.



付録 1 : Wellness Wheel